

光の子



No.140 2010.1.1

●年間聖句 友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。
(ヨハネによる福音書15章13節)

明けましておめでとうございます。
本年もよろしくお願い申し上げます。

社会福祉法人 光の子どもの家



はつもうで

「初詣」

挿絵・中島英子

「少し雪」

白マスク己れを恃むほかになし

両耳の助けも借りてマスクかな

水輪より光り引きこむかいつぶり

冬天をきしませて舟下るなり

たそがれの鴨のあまたをみはるかす

少し雪少しぜいたくしてみた

新しき年の光の子どもたち

落合 水尾

(「浮野」主宰)

新しい年へ 竹花信恵

新年明けましておめでとうござい
ます。昨年も多くのお励ましをいただき
まして、心より感謝申し上げます。
「友のために自分の命を捨てること、
これ以上に大きな愛はない。」(ヨハネ
による福音書十五章十三節)が今年、
私たちに与えられた年間聖句です。心
を騒がせること多く、今度はいつたい
何が起きるのだろう、どんなことと出
会ふのだろうと、不安と覚悟が表裏一
体の状況の私たちは、この御言葉に大
きななぐさめと勇気を与えられます。
未熟な私たちですが、力を合わせて子
どもたちと共に歩んでまいります。皆
様の前に、この年も神様の豊かなめぐ
みが満ちあふれますように。
おかげさまで「光の子どもの家」は
創立以来二十五年の月日を重ねること
ができました。区切りのない経過の中
のひと区切りとして、そして初心を取
りもどすためにも振り返ることが多く
なりました。
草一本もない茶色の土地。雨が降れ
ば元の田んぼに逆もどりで土が流れま
す。まさに何も無いところからの出発
でした。その地に建てるための土台は、
多くの方のお力を得て形づくられ、そ
の上に子どもたちの「家」として育て
ていただきました。今では緑豊かな、
そして冬には焼きいもがたくさんでき
そうな葉を落とす木々に囲まれ、何よ

りたくさんのご支援の中で、子どもた
ちが元気に暮らせる「家」として深く
根を下ろすことができました。
大変な社会状況の中で、まっ先に最
も弱い、最も小さい者が傷ついていき
ます。さまざまな事情によって、この
家に入所した子どもは昨年百人目にな
りました。できるだけ、ごく普通の家
族に替わる家庭の養育をめざしている
ので、生活単位は小さく、ひとりひと
りとの密な人間関係をつくりながらの
生活を展開しています。誰と比べるこ
とではなく、その子らしく生きて欲し
いと願うだけです。自立していくとい
うことの困難さは、いつも私たちの
目の前にある問題です。
ひさしぶりのなつかしい卒園生の話
題が出てくると、一気にその頃の空気
が流れ込んでくるようななつかしさと
そして、どこか痛む思いになります。
役に立ちたいと思いがちでも何もでき
ないという現実の中で、立ち止まるこ
とも何回あったでしょう。そんな時に
背中を押して進ませてくれるのも、や
はり子どもたちです。
これまでのたくさんのお会いに、ま
た新しくやってくる子どもたちを加え
て、人がつながっていきます。それぞ
れにとつて、いい年となることを願っ
ています。そして、もしそのためにで
きることがあるならそれを可能にして

いく一年にしていきたいと思ひます。
残念ながら「おうちに帰りたいよ」
の言葉には、その気持ちを充分受け止
めることしかできません。ですがその
分、それ以上に、この家でみんなであ
る生活にしていきたい。おうちの方
ともそこがつながっていられますよ
うに。いつの日か自身であたたかいお
うちをつくっていきましょう。
「勉強をがんばる」とはきつてい
る子どもたちもいます。大学への進学
の道を切り拓いて下さったことで、目
標をもてたからかもしれません。本
当にどうもありがとうございます。や
れはできる、ということの自信につな
がる第一歩が踏み出せますように。
もうひとつ願いを込めて「言葉を大
切にします」をこの家の抱負に加え
たいと思います。人は言葉によって弱
り、そして言葉によって力を得ます。な
げない一言でうれしくなったり悲しく
なったりする経験は数えきれません。
「光の子らしく歩みなさい。」(エフ
エソの信徒への手紙)という聖句によ
って名付けられたこの家です。「光の
子らしく」新しい年を歩めるよう祈
ります。
本年もどうぞよろしくお願いしま
す。

「共育ちカンガルー日記」

(5) 冬のたんぽぽ

近藤みちる

これといった趣味の無かった私が
俳句を嗜むようになったのは、娘が
生まれて半年ほどたった春のことだ。
秋に出産してからというもの、昼夜
を問わず泣きぐずる娘に途方にくれ
娘と一緒に泣いてばかりの毎日を送
っていた。その年の冬は、さながら
冬眠のごとく悶々と家にこもる毎日
だった。この冬ほど春が待ち遠しく
感じた冬は今までになかったように
思う。

春一番が吹くと、私は娘を抱き毎
日外に出るようになった。桜の蕾が
膨らみ始めた公園のベンチに腰を下
ろし、膝に乗せた娘と二人、眩い春
の光や風に体をゆだねるひとときを
毎日楽しんだ。

桜の蕾がほころび出したある日の
ベンチでのこと。降りそそぐ春の光
が、娘のふわふわしたやわらかい髪
にまわりついているかのように見
えた。私はふと「春光」という春の
季語があったことを思い出した。俳
句は十数年前にほんの少しだけかじ

ったことがあった。胸の中で何かが
弾け、積もり積もっていた思いが堰
を切ったように溢れ出した。
春光のまとはりつきし産毛かな
みちる

思いはまるで雪のように五七五に
結ばれた。それがきっかけだった。
私は自分の胸の中に日々沸き起る
思いを俳句に託していくことに夢中
になっていった。

俳句は鉛筆一本と句帳と歳時記が
あれば、いつでもどこでも誰でもで
きる、実に手軽な趣味である。お金
もあまりかからない。日々の暮らし
の中で出会う何気ない風景や出来事
を写真のように切り取り、自分の知
っている言葉で言いとめるだけだ。
その後ある俳句結社に入会し、結社
誌に投句するようになった。月一回
の句会に参加するようになると、た
ちまち句仲間もできた。育児に追わ
れ消耗するばかりだったそれまでの
毎日が少しずつ変わりはじめ、俳句
を通して私は自分を取り戻していっ

た。
俳句の一番の魅力は、何といつて
も美しく生命観に溢れた豊富な季語
にあると私は思う。すやすや寝息を
立てている娘の傍らで、歳時記を開
くのが何より楽しいひとときである。
「風光る」「山笑ふ」「ぶらんこ」み
な春の季語。夏には「虹」「夕焼」、
秋は「小鳥来る」「木の葉降る」、冬
には「山眠る」「日向ぼこ」。どれも
私の大好きな季語である。
冬のたんぽぽ初めてのベビー靴
みちる

その年の冬は、よちよち歩きを始
めた娘を追いかけるが、毎日家の
周りを散歩するのが日課になった。
それまで一度も足を踏み入れたこと
のなかった路地裏や土手や空き地な
ど、娘の足の向くまま散策した。春
にしか咲かないと思っていたたんぽ
ぽが、実は冬にもたくさん咲いてい
ることを知ったのもこの冬だった。
冬の日溜りに肩を寄せ合うように咲
いているたんぽぽを、俳句では「冬
たんぽぽ」と呼び、そのたくましく
も健気な生命力を尊ぶ。私と娘は毎
日競うように冬たんぽぽを探した。
おそろく、それまでにも冬たんぽぽ
を目にしたことは何度もあったはず
だ。ただ気にも留めなかったのだろ
う。

娘と過ごす三度目の冬を迎え、彼
女はいよいよ風の子となり、寒さを
ものともせず毎日外を駆け回ってい
る。私もマフラーに手袋と完全防備
で、北風と追いかけるこの毎日であ
る。公園の隅っこの日陰で見つけた
薄氷、夕暮れの中で出会う焚火。何
気ない風景の中に人々が暮らし、子
らが遊び、空が、風が、そして万物
の生命がきらきらと輝きを放ってい
る。娘と共に過ごす毎日は、実にた
くさんの感動を私にもたらしてくれ
る。

新年を迎えると間もなく寒の入り。
一年で最も寒さが身にしみる時期と
なる。「春待つ」という晩冬の季語
がびたりくる季節だ。悶々と冬眠
していた二年前の冬が、今では随分
と昔のことのように思える。あの頃、
もしも歳時記を開いて「春待つ」と
いう季語を見つけていたら、もっと
素敵な冬籠をしていたことだろう。

平凡な日常の中にこそ、何にも代
えがたい宝石のような感動がひそん
でいる。娘と一緒に春を待つという
ことが、どんなに楽しくて幸せなこ
となのか、しみじみ噛みしめている
今年の冬である。
春待つや積木つんでくづつしては
みちる

エッセイ

第四楽章及び希望の第一楽章

彫刻家 中島 睦雄

前号の末尾を、次のように結んだ。
「私のフンダリケッタリの第四楽章は、まだである。その第四楽章がどんな展開になるのか、はなはだ心配だ。
やはり未完成にしておこう。」

この心配が、残念なことに現実になってしまった。

家内の、足の骨折に続いての入院。手術をするかしないかの検討が続いていた。私は、片道一時間弱の病院へ毎日通った。

「あれ持ってきて。」「これを持ってきて。」そんな事はオチャノコサイサイである。場合によっては一日に二回往復することもあった。

それに加えて、私自身の関係の行事などが、いくつも予定されていた。十月から十二月は、特に多い。出品する展覧会が三つ、たて続けであり、会議だコンサートだと忙しかった。

私は、決して疲れたという感じを持たず、あつちだこつちだと動きまわっていた。

ところが、或る日の明け方、六時半頃だったろうか、急に目眩がした。しかも、今まで経験したこともないひどいものであった。

家内は病院。子供たちは別暮らし。一人暮らしの私は、やむを得ずケータイで、一番近くにいる息子に連絡し、救急車で病院へ入れてもらった。

病院でのスタートは、頭がぐらぐらして、何が何だか解らなかつた。食事でも全く食べたくない。初めの四食は手をつけずに返してしまつた。その後、食事が少しずつ入るようになって、今度は、飽きてしまつて、困つた。

看護婦さんが頻繁にやってくる。細々と面倒をみてくれる。看護の人、介護の人など、制服の色が多少違って、それぞれの仕事の分担があるようだが、みんな優しい。患者に明るく声をかけて、患者を

励ましてくれる。このように、苦しんでいる人、困っている人を助ける人々は、やはり貴い存在である。

体が恢復してくると、頭の中も楽になる。戯れに五・七・五を並べてみた。

○昔から 白衣の天使 今もなお

○老患者 白衣の天使に 甘えてる

○お見舞に やせ我慢して 笑顔見せ
こんなわけで、私のフンダリケッタリ第四楽章も終わりである。このあたりで新しい楽章に入ろう。

新しい年は、既に自分に課題を考えている。その中の一つに、彫刻の作品を完成させるという当面の課題がある。誰に頼まれたのでもなく、大分以前から作ってみたと思つていたのである。

題名は「こだま」と決めてある。私の場合、理屈や構想が先行してしまつて、実際の作品ができ上らなかつたという例は、幾つもある。ので、構想の段階で人に話すのは、本当は控えた方がよいのは、解っているのだが。

以前、私は展覧会への出品をサボっていたことがある。そんな時、先生から電話が掛かって来た。

り、そこいら辺にあるイスにへたり込んでしまい、友人たちが見学から帰ってくるのを待つような事態にまでなつてしまつた。

こんなわけで散々な旅行であったが、帰宅してGoogleで調べてみると（こんなことも医師免許証保持者はしてはならないのだが、症状が「脊椎管狭窄症」に似ている。Googleには「自然に治癒することはなく、しだいに症状は悪化していく」と書かれている。

実は兄がこの病気に罹患し、いま難行、苦行をしいられているのである。

そのとき、兄の痛みが私に移ってきて、兄の苦しみが和らぐのなら、引き受けなければならぬまいと、真面目に思った。

なにしろ、長いこと親代わりをしてもいい、苦勞をかけてきたこともあり、苦しむ様子を遠くで見ているのはとても辛いものである。

そうはいっても、これから続くだろう自分の足の痛みのことを想うと、憂鬱な気分が陥らざるを得なかつたのも事実である。

MRIの写真の結果から、パラグアイの医師は、少なくとも脊椎管狭窄症や椎間板ヘルニアではないと言ふ。

症状は少しずつ軽減してきて、

「君はやる気があるのか？」私はすかさず答えた。「はい、やる気はあります。」「だったらね、次の展覧会には出せ!!」「はい、今、構想を練っています。」「君は、構想ばかり練っているんだな。」

この会話は、今思い出しでもおかしくなる。今でも私は、構想を練るのは得意だからである。

しかし、今度は構想だけでなく作品を完成させたい。

「こだま」は、子どもの像である。大きな声で呼んでいるポーズ。

はるかな未来に 何かがある
声のかぎりに呼びかけよう こだまが きっと 返ってくるから

これは、子供に寄せる期待である。と同時におとなに対しても、子供に大きな夢を持たせようというそして、努力させましようという呼びかけを裏に秘めている。

これは、このどちらのこともやらなかつた私の、切実な反省の上に立っているの、それだけリアリティがある筈である。

この「こだま」の像は、今年の最初の作品として完成させよう。そしてこれを、新しい年の希望の第一楽章としたい。

医師の診断の正しさを指し示しているようであるが、疑い深い私はMRIの写真をCDにコピーしてもらい、脊椎の整形外科を専門としている教息子に送って、診断を待った。

その結果がメールで昨日来た。診断はパラグアイの医師と同じで、おそらく無理なストレッチをしたときに、いわゆる肉離れを起こし、それが原因で坐骨神経を圧迫したのだろうということであった。年寄りの冷や水といったところであろうか。

自分の病気のことでこれだけ安心したが、また兄のことを想うとき、心は暗れない。

どうも、神様は不公平のように思えてならない。同じように不摂生を繰り返してきた二人なのに、どうして兄だけをこんなにも苦しめなければならぬのか。

当面私が考え得ることは、今の自分が出ることを、自分のためだけではなく、他人のためにも精いっぱいやっていくことが、兄の恩に報いることになるのではないかとたったことだけである。



柱管狭窄症？

JICAシニア海外ボランティア 仙道 富士郎

膝の事故からしばらくして膝関節の慢性的な痛みをおぼえるようになって、

教え子の整形外科医の診断を受け、彼の勧めでストレッチを始めた。膝は完治し、いまは全く

問題は無い。老人は偏執狂的なところがあるように、腕立て伏

せや腹筋も加えるようになり、一回のストレッチにかける時間が段々長くなり、現在は一回一時間である。

ところが、自信満々の私の足に最近異変が起こった。テレビで見

たダイエット体操とかのマネをして、腰を深く沈めて足を前後に開く運動をしたことがきっかけだ

たと思うが、左大腿に移動性の痛みが現れ、増悪していった。抗炎症剤を含んだ湿布などでごまかし、痛い足を引きずりながらなんとかテニスもしたりしていたが、事はそう簡単には済まなくなつた。

ある暑い日に（今パラグアイは夏である）テニスをしたところ、翌翌日から、痛みがひどくなり、夜も眠れない状態に陥ってしまった。日本から持ってきている強い抗炎症剤の座薬を使うと少しはよく良くなるものの、立つて歩き出すと痛みはひどくなる。困つたことに、激痛の走つた翌日に、友人たちとパラグアイのチャコ地方というところに旅行する約束をしていた。私一人のために旅行を中止するわけにもいかず、「ままよ」と大量の座薬を携えての参加とはなつた。

不思議なことに（いやしくも医師免許証を持つている人間がこんなことを言つてはいけないのだが）、座位ではほとんど痛みがなくなるので、自動車による移動は平気であったが、施設の見学などのために歩きだすと、二〇メートルも歩かないうちに痛みが強くな

明けましておめでとうございます

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。
皆様のお祈りとお支えのうちに、幼児六名・小学生十四名・中学生八名・高校生七名・大学生一名・自立支援中の卒園生五名・職員二十三名と共に、二十五回目の新年を迎えることができました。心より感謝申し上げます。

四月には、新たに三名の大学生が誕生すること、今年より、私たちを応援してくださいます方々が、大学等に進学する子どもたちの支援が少しでもできないだろうか、「光の子どもの家 自立進学基金」を立ち上げていただきました。子どもたちと共に職員一同感謝で一杯です。

子どもたちが、十八歳で社会に出て自立するには、あまりにも厳しすぎる現実が待ち受けております。子どもたちの自立に向けて、「自分たちができる支援はしていこう」と、決意を新たに、本年も歩んでまいります。これからも皆様方よりのご指導を賜りますようにお願い申し上げます。

新しい一年も皆様方の健康と平安をお祈り申し上げます。
施設長 田中 郁夫

新年明けましておめでとうございます。
昨年も多くの方々にお支え、お祈り頂きましてどうもありがとうございます。

クリスマスが終わると、餅つき、年越し、元旦と目が回りそうなほど忙しい。

本年もよろしくお願い致します。
鈴木 晶子

皆様、新年明けましておめでとうございます。
四月に引っ越しをし、新年度当初落ち着きのなかった子どもたちが、今ではすっかり新メンバーでの生活に慣れています。手伝いを全くしなかった子が今では「何かやることある？」と聞けるようになったり、次の日の準備を一人で出来るようになったりと、成長をたくさん感じられた昨年でした。もちろん良いことばかりではありませんでしたが、こうして皆で生活を創り上げて行けるのも、皆様からのご支援あつての事だと感謝しております。

今年も様々な事をご報告できればと思っております。あたたかいご支援を、どうぞよろしくお願い致します。
田口 貴子

明けましておめでとうございます。
昨年は大変お世話になりました。皆様の温かいご支援に感謝しております。月日の流れは本当に早いもので、私がおこに來てから三回目のお正月を迎えます。毎年、今年こそは「という思いでやっています、なかなか上手にいかないことが多いです。それでも、今年も諦めずにやっています」と思っています。お正月は、そんなことを考えさせてくれる時期だと思います。また、子ども達もお正月をとてても楽

いです。でも、こうして新年を迎えられることを嬉しく思います。

今年も皆が健康で過ごせますように。どうぞ今年もよろしくお願い致します。
池田 祐子

明けましておめでとうございます。
皆様のお支えによって、子どもたちは今年も大きな成長をみせてくれました。子どもたちがそれぞれの夢を抱きながら諦めずに向かっていけるような毎日を目指して励んでいきます。
今年もよろしくお願い申し上げます。
小西 剛史

新年明けましておめでとうございます。
いつも暖かいご支援を頂き心より感謝申し上げます。

十二月二十八日には、恒例の餅つきが出来ました。白も杵もぼろぼろになり困っていた時、もし使えたらと花台にしていた臼と杵を置き、一難が去りました。六十キロの餅米にも恵まれ感謝の気持ちでいっぱいです。

今年も卒園生の家族含めて大勢見える事でしよう。たくさんの方々の心づかいで、お正月を無事迎えられます。今後ともよろしくお願い申し上げます。
鎌田 洋子

明けましておめでとうございます。
旧年中も皆様から多くのご支援を賜り、心から感謝申し上げます。
昨年子どもたちの笑顔にたくさん

しみにしています。今年も子ども達と楽しいお正月を過ごしたいと思っております。
今年もよろしくお願い致します。
高野 真夕子

明けましておめでとうございます。
今年も非常勤職員として頑張っています。
“老いては人の為に”
五木田 供三

明けましておめでとうございます。
昨年は皆様の格別のご厚情を賜り、誠にありがとうございました。
光の子どもの家の職員として、子どもたちのためにという基本に立ち帰って、地道にひとつずつ、目の前の出来ることに取り組んで参りたいと思っております。
本年も変わらぬご支援、よろしくお願い申し上げます。
田中 要一

明けましておめでとうございます。
昨年も皆様からの篤いご支援を頂きありがとうございました。昨年度から光の子どもの家の職員として働くようになり、不慣れなことばかりで、皆様には色々ご迷惑をお掛けしたかと思ひます。今年は、昨年度の失敗を振り返り、出来る限りご支援いただいている方々の思いに込められるような働きに努めたいと思ひます。これから光

出会うことができました。更に笑顔のあふれる光の子どもの家となるよう、励んでまいります。その笑顔を皆様にも見ていただきたく思っておりますので、お近くに来られる際、また子どもまつり等の行事の際には是非こちらにお立ち寄り下さい。
今後ともご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。
鈴木 康孝

明けましておめでとうございます。
子どもたちが生活を楽しくながら成長していけるように、今年も心を尽くしていききたいと思っています。そして子どもたちの笑顔と共に私自身も成長していけるように頑張っていきたいと思います。どうぞ今年も温かい見守りとご支援をよろしくお願い致します。
皆様にとってもよい一年となることを祈っております。
積 みどり

明けましておめでとうございます。
昨年もおたくさんのご支援を、本当にありがとうございました。
光の子どもの家で過ごす時間を重ねる度に、皆様からのご支援があつて初めて子どもたちにとってより良い生活を目指すことができるのだと、より強く感じるようになりました。
この一年も皆様のご支援に恥じぬ働きを目指して、努力し続けたいと思ひます。

の子ども達の家をよろしくお願い致します。
福島 文明

新年明けましておめでとうございます。
昨年皆様からのご理解とご支援を頂き、ありがとうございました。お陰様で子どもたちはこの年も元気に迎えることができている。笑顔いっぱい遊ぶ子どもたちの顔を毎日見られることを心から感謝しております。

今年も栄養満点の食事で元気な笑顔をたくさん見られるように励んでまいります。変わらぬご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。
平川 光子

明けましておめでとうございます。
旧年中は暖かいご支援をありがとうございました。
誕生会や子どもまつりなど、皆で協力し合つての行事では、たくさん喜びを頂きありがとうございました。また私事ですが、入院という出来事があり、子どもたちにも職員の皆様にもたいへんご迷惑をかけてしまいました。今年はその分も頑張らなくてはと思ひます。

皆様にとって健康で喜びに満ち溢れた年になりますように心よりお祈り申し上げます。
今年もどうぞよろしくお願い致します。
梅田 由味子

河のほとり 倉澤家

あけましておめでとうございま

す。昨年中は大変お世話になりました。本年もよろしくお願い致します。

先日小学校三年生の成黎に、「もしも、ひとつだけ願いが叶う、魔法の杖があったらどうする？何を願いたい？」と尋ねました。

二〇年程前にも、同じ質問を、その頃の担当の子どもにしたことがありました。その子は確か、両親と兄、家族みんなで出かけたかったと答えたように記憶しています。家族関係の希薄な成黎も、恐らく同じようなことを考えているのだろう。そう思っていました。しばらく「うーん、どうしよう。」「うーん、ひとつだけですよ？」と、散々考えた挙げ句に、成黎の出した答えは、「痩せたい！」でした。

実はこのところ体重がグーンと増え、会う人みんなに「太ったね！」と言われている成黎。担当

者や他の職員からも、「食べた分だけ動きなさい。」「マラソンでもしたら？」と言われることが多くなり、本人なりに気にしていたようです。

お正月はごちそうを食べる機会がいっぱい。残念ながら魔法の杖はないので、食べた分だけ動いて、痩せましょう！

倉澤 智子

子どもたちの季節 仙道家

新年明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願ひします。

今回は印象に残った出来事をご紹介します。

十二月五日に上尾の方で、埼玉県長縄大会が行われました。小学校六年生がこれに参加しました。五年生から担任して下さっている先生が意欲的に取り組んで下さり、今年が二年間の成果を発揮する日です。長縄大会の練習はクラスで体育の時間、休み時間や放課後、時には授業を削ってやってきたそ

うです。担当している達貴くんも腕を骨折しながらも「出たい！」とお願ひし、参加させていだきました。

そして当日、子どもたちの緊張した表情。沢山の参加者、応援の方々がいる中、長縄一分間とびが始まりました。これは一分間に何回跳べるかを競うものです。六年生で二チームあり、まず一チーム目がスタート。ゼーの！の力強いかけ声と、子どもたちの真剣な表情。一回も引かかることなく、見事二〇三回という記録を出し、一位！二チーム目も四位という結果を出しました。子どもたちの表情、頑張りには保護者の方、先生方と一緒に喜び合いました。また、チームに入らなかった子まで涙を流し、一緒になって喜び合っている姿に、また感動させられました。

六年生は、強いきずなを得、貴重な経験ができたと思います。子どもたちには、感動をありがとうございます。何にも変え

る事のできない思い出を手にした達貴を前に、この仕事をしていてよかったなと思う瞬間でした。

岩瀬 志穂

光の中で 佐藤家

明けましておめでとうございま

す。我が家の長男憲也が、一般推薦入試で都内の総合大学に合格することができました。

倍率もある程度あったため合格発表の日までは不安な日々を送っていました。せっかくだから大学の掲示板で確認したらと勧めたのですが、「もし落ちた時はショックだから」と家でインターネットで合格発表を見て確認。普段はクールな憲也もこの時ははとて面白い笑顔でみんなの祝福に應えていました。

数年前は生きていく目標が見いだせずに、ニートになるフリーターになるなどと言っていた憲也が色々考えた末に決めた大学進学、そして新たなスタートラインに

立ち歩み始めました。憲也には、たくさんの人たちが君の夢を応援してくれているので期待を裏切らないように有意義な学生生活を過ごすように伝えました。

この十月より評論家の芹沢俊介先生に発起人代表となっていただき光の子どもの家自立進学基金が発足し、応援者の方も増えてきております。皆さんの応援に應えるためにも、光の子どもの家を巣立っていく若者たちが「生まれてきてよかった」と思い続けることができる人生を、サポートしていきたいと願っています。

穴水 祐介

原田家日記

あけましておめでとうございます。昨年は格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

四月に光の子どもの家に来て、初めてのお正月を迎えました。「去年の正月はどうしていたのだろう」と考えてみると、ひたすらだらける寝正月でした。猫と一緒に炬燵に居座り、自分の手の届く範囲に緑茶、干し芋、テレビのリモコンを置き、大掃除で筋肉痛になった身体を労っていました。

それに比較すると今年は、とても賑やかでよく動くお正月です。原田家の子どもたちは、盆正月関係無しで二十四時間フル稼働。

(唯一、寝ているときは天使の寝顔でとても静か。...)それに合わせて動いている大人に、正月太りの心配はないのかもしれない。

中三の一は今まさに受験勉強の追い込み中！のはずです。彼の努力が報われて、サクラ咲く春の訪れを願うばかりです。

高三の育実はこの春短大に、小六の綾は中学校、年長組の北斗は小学校、颯太は幼稚園にそれぞれ入学・入園します。「育実はどうな女子大生生活を送るのかな？」「綾は何部に入るのだろうか？」「北斗、颯太にお友達がたくさんできるかな？」と思いを巡らせるだけでも、随分楽しいものです。会話を通して楽しみの共有をしながら、新しい環境でのスタートを各々が心待ちにできるように、また元氣よくスタートを切るようにサポートして行きたいものです。

また今年は、冬季五輪やサッカーワールドカップ、上海万博など世界的イベントが多い年でもあります。我が家の子ども達も、選手たちのように全力で物事に取り組

み、成長できる実り多い一年になりますように。...

私自身も子どもたちと向き合い、少しでも成長できればと思います。最後になりましたが、今年も子どもたちを温かく見守ってくださいますよう、よろしくお願ひ致します。

和田 優右子

季節のおとずれ 竹花家

新年あけましておめでとうございます。心新たに、今年も子どもたちと過ごしていきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

五年生の美也子は努力家で自分のことは自分でやるしっかり者。私がグループホームを担当することになってから担当した子どもでも、私が本園から異動し竹花家の担当になった二年前、その時期は竹花家の職員の入れ替わりが続いていた時でもありました。当時四年生になったばかりの美也子が「なんで、職員がいろいろ変わるの？」「友達に変な家って思われるじゃん」「授業参観来なくていいよ」などとストリートに、しかし、表情を変えず淡々と気持ちを表現していたことは、私にとって

とても印象的でした。関係作りには時間が必要...と思ひながらも、兄、要と二人だけの世界を持つ美也子に対し、なかなか距離が縮まっていたという実感を持ってない日々が続いていました。

そんな美也子との関係に最近変化がありました。...

「ねー髪の毛結んでー」

「一緒に風呂入ろうー」

「一緒に筋トレやろうー」

「明日の洋服一緒に選んでー」

このようなお願いが美也子からあるのです。「もう五年生だし、しっかりものの美也子だから...」と思っていた美也子からのかわいいお願いの数々。私は驚きながらも嬉しくなり、できるだけ応えてあげたいと思うようになりました。一緒に過ごしてきた毎日の積み重ねが今の美也子との関係につながったのだと実感した出来事でした。あわただしい毎日に流されがちですが、子どもたちの小さな変化を見逃さないようにしていきたいと思ひました。

牧野 由紀子



摩 擦

菅原 哲男

謹賀新年

他人様の生んだ子どもを育てるとい
う、「しごと」が成り立つことに何の
疑問も持たずに日々の暮らしが流れて
いる。ふと、そうかな？と訝ることが
このところしばしばある。

そんなままに新しく歳を重ねる。
児童養護施設に起きた出来事が十二
月初旬に相次いで新聞に載った。

埼玉県内の施設で、若い保育士が子
どもたちに日常的に言語による暴力を
加えたというものと、ある程度経験の
ある男子職員が、子どもたちのケンカ
に割って入り、勢い余って子どもを投
げ飛ばし、骨折させたというものであ
った。(埼玉新聞)

もう一つは東京の児童養護施設で、
ショートステイで預かった幼児が乾い
た菓子をもめに食べて就寝した。翌朝
窒息死していたというものであった。
(朝日新聞)

埼玉県の保育士の事例では、若い保
育士にありがちな、かなり荒っぽい関
わりである。保育士は最後まで暴力と
は認めなかった。そして退職していっ
たそうだ。

骨折に至らした男子職員の場合は、

保護者が訴えて出る騒ぎとなり明る
みに出て、慰謝料を支払い収めたとい
う。この男性職員も退職した。

東京の児童養護施設の件は、業務上
過失致死で送検された記事だった。当
該の園長は「コメントできない」とあ
り、死亡した子どもの母親は「送検さ
せることが最初の目標だった」と述べ
ていた。

このはたらきに加わる者の目的や動
機は、おおよそ金儲けや社会的身分の
高きなどが目的ではないだろう。出来
ればかわいいような子どもたちの役に立
ちたいという、ボランティアな思いや
決意によっていると思われる。他人様
の子どもを預かって育てるというはた
らきは、そんな牧歌的な思いで関わる
には重すぎるし大きすぎる。しかしそ
んな思いや決意がないと出来ないこと
でもあるのだ。何となく思いを寄せて
一緒に暮らすことを思い立ったカップ
ルのようにも思える。一緒に暮らす決
意によって家族の原初が形成されるの
である。そこには、大勢が集まって祝
福しなければならぬほどの「危うさ」
が含まれているのである。

そのようにして暮らし合う中に子ど

もが加わり、家族という形態へと移行
していくのだ。そのようにしてつくら
れた家族の中で、あつてはならない虐
待などの不適切なことが発生するのだ
である。暮らしの要求するエネルギーの
膨大さである。

複数の人格は、暮らしのありような
ど、かなり確認し合ったとしても違う
方向を向いているものである。もちろ
ん重なる部分がない場合の場合は大き
いのだ。

どうしても生じるこの向きや質量の
違いが摩擦を引き起こす。摩擦は出来
ればない方がいいと考えがちだが、あ
る意味当然である。摩擦のない暮らし
や社会などあるはずもないのだ。もの
すごい勢いで世の中は変わり続けてい
る。ものすごい勢いは当然相当な摩擦
を生じる。その摩擦は暮らし合う当事
者すべてに求められる、進むためには
必要なのだ。

児童養護施設では、二桁以上の人格
が身を寄せながら暮らすのである。摩
擦係数は想像を超えて高まる。摩擦は
熱を生じる。その熱が快かつたり前進
のためであればいいのだ。時として摩
擦熱に耐えられないことは考えておか
なければならぬ筈だ。

そんな筈ではなかった、とほぞをか
む前に、どちらの方向を向いてどう暮
らし合うのかを確認し続けなければな
らないのである。暮らしの向きを確認

し、同じように進んでいる手応えの中
で信頼が芽生えるのだ。信頼が前へ進
めるエネルギーになる。

新聞報道されたところは、少しく暮
らしについての説明と確認しながら進
めて信頼を勝ち取る努力が不足してい
たものだろう。

埼玉の件も東京のそれも、相互理解
への努力を日常的にしてこなかったよ
うに思える。子どもの親や関わる者同
士における信頼が暮らしを紡ぐのに充
分ではなかったのだ。

暮らしの中で何事かマイナスな事象
が起きれば争いになる。そして争いは、
勝ち負けを際立たせる。慰謝料を勝ち
取り、まずは送検という目的の達成が、
勝ち負けなのだ。

暮らしの当事者は、摩擦を避けるよ
りも、必然な摩擦をどう受け入れるの
かを開示する必要があるのだ。子育て
についての情報を伝え合い、確認しな
がら進めていくことの大切さなのであ
る。

こんなに苦勞をしながら我が子を育
ててくれているという現実が、家族な
どに開かれていない結果がもたらした
不祥事と、それに伴う争いではなかつ
たのか、と思うことしきりの去年今年
である。



現場から

続・光の子らしく

④

岩崎 まり子

明けましておめでとうございま
す。旧年中は大変お世話になりま
した。

皆様、いかがお過ごしですか。

昨年ものいろいろありましたが、
大きなことにならずに済んだのは
周りの方、とりわけ子どもたちと
日常的に関わる学校の先生方はじ
め、級友の方々、地域の方々のご
理解があったからだとかから感謝
しています。

丘実ちゃんの無礼でキツイ表現
は、いろいろな場面で問題になる
ことが多く、基本的にはひたすら
誠実に謝罪し、理解を得ていくし
かないと思っていますが、時

には私自身が彼女の態度の悪さに
声を荒げてしまうのです。
「まり子さんも丘実ちゃんのまね
するから。そうしたら、された人
の気持ちがわかるかも知れないも
んね。」

「やだ。」
「嫌な気持ちになるのがわかるの
なら止めなさい。」
「ごめんなさい。」

そんなやりとりも、もう数えき
れないくらいです。この「ごめん
なさい」まで数分のこともありま
すし、二日以上かかることもあり
ます。叱っているのか怒っている
のか自問しつつ、私には、自分の
未熟さや無力さを思い知らされる



こういう場面に對しての苛立ちだ
ということの自覚はあり、そのこ
とでまた自己嫌悪になってしまう
のです。

丘実ちゃんのこの一年を振り返
ってみれば、このくらいで収まっ
ているのは表彰ものです。もっと
言えば、彼女のこの十年程を振り
返ったら感謝しかないのが本当だ
ろうと思います。

入所当初、彼女はいろいろな物
を壊し、人に対しての暴力も相当
でした。今はそれも減り、専ら言
葉と態度で表現してきます。彼女
の中の不満や苛立ちは表現される
べきですし、それは保障されるべ
きです。そう思っているにも上手
く受けとめることが出来ず、それ
を埋め合わせるために居続けてい
るようなところがあります。頭に
くるようなことをされても、居
る、怒っても、居る、叱られ
ても、居る、居続ける、お互
いに...。

そんな中でしかお互いの「ごめ
んなさい」は聞けないように思
います。こちらの本気は必ずわか
って受けとめてくれる丘実ちゃん
です。

これから先も、私は彼女と、そ
して私自身と格闘し続けるのでし

訂正とお詫び

百三十八号に掲載した芹沢俊介氏の「光の子どもの家 第二十五回感謝の集いに参加して」の
紙面の一部に誤りがありましたのでここに訂正と共に深くお詫び申し上げます。

●三段目二十一行目

「そこに受けとめ手がなければ不可欠の条件です。」

●訂正

「そこに受けとめ手がなければ不可能です。子どもから、自分の受けとめ手とみなされるよう
になるためには、子どもと一緒にいるということ、そこに居続けるということが不可欠の条件で
す。」

芹沢氏には光の子どもの家から出発する子どもたちの自立、進学への幅を拓くという趣
旨で「光の子どもの家自立進学基金」を立ち上げて頂き、同基金の代表を務めて頂くなど、日頃
から厚いご支援を賜っております。氏の文意を損ねてしまうような誤りがありました事を重ねて
心よりお詫び申し上げます。

編集委員長 鈴木洋一 施設長 田中郁夫

あけましておめでとうございます。

2010年度も基準外職員確保のためのバザーを
行います。バザーの品物のご協力をよろしく

お願いします。 ☆光の子どもの家バザー実行委員会☆

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2009年10月1日▶11月末日

2009年10月現在

幼児6名 小学生14名 中学生8名 高校生7名 措置外
5名 計40名

- 1日 群馬県の児童養護施設「希望館」より見学で14名来
訪 小規模化に向けて光の子どもの家の養育につい
て説明
- 2日 タ礼拝に新村義一牧師が説教奉仕 感謝
- 4日 幼稚園運動会 運動の秋に一生懸命走ったり演奏し
たりの可愛い姿に自然と声援も大きくなる
- 9日 タ礼拝に東大宮教会山ノ下恭二牧師が礼拝奉仕 感
謝
- 14日 光の子どもの家後援会によるそば会 赤十字奉仕団
による除草作業 日頃のお支えを心より感謝
- 15日 わんぱくな子どもたちがお世話になっている幼稚園
との連絡会 きめ細かい情報交換ができた 心より
感謝
- 24日 ハムコ会50周年記念式典へ田中施設長が出席 長年
にわたる光の子どもの家へのご支援を感謝
- 30日 高三育実が志望校の短期大学合格 晴々とした表情
で報告してくれた育実に子ども・職員全員からの祝
福 新しい歩みの第一歩を踏み出す
- 11月
- 3日 第90回理事会・第25回感謝の集い 晴天に恵まれ今
年も多数の支援者・協力者の方々のご出席下さる
光の子どもの家のはたらきが4半世紀を過ぎても尚

多数の志篤い方々に支えられながら続けられている
ことを改めて思い心より感謝

- 6日 タ礼拝に杉本英夫様が説教奉仕 感謝
越谷市民生委員の方々が来訪見学
- 9日 小舎制養育研究会へ田中施設長と岩瀬保育士が出席
社会的養護の現状と課題について小規模化が進む施設
での養育がどうあるべきかを探る 米国のボーイズタ
ウン（米国最大の児童養護団体）の幹部の話もあった
今後何を提言し先駆けていくかを検討しなければなら
ない 現状と理念の狭間を埋めるはたらきが必要であ
ることを確認
- 14日 光の子どもの家後援会によるそば会 一番近くでお支
え下さっている方々と子どもたち・職員共々おいしい
うどんとそばの昼食を囲む 感謝
- 21日 オレンジリボン第7回鎮魂の集い&パレードへ田中施
設長が出席 児童虐待防止への社会的関心も高まって
きている 「子ども虐待のない社会」の実現への祈り
を込めて

〈10月・11月の物品ご寄贈者〉

坂本和加子 落合美佐子 清水智子 藤井多嘉史 齊藤米屋
日本聖書協会 杉山和俊 武藤陽子 小早川典子 松本明子
後藤利子 岩槻教会 藤田陽子 福楽 山本治州彦 溝呂木武
幸 他多数の御各位様
☆私たちの歩みが皆様のご理解とご協力により支えられており
ます 心より感謝申し上げます（洋）

/// ———— 反 射 光 ———— ///

☆新年明けましておめでとう
ございます☆旧年中も皆様か
らのあたたかいご支援を賜り
心より感謝申し上げます☆お
盆とお正月は家族の色が濃く
なる季節☆自分の家に帰って
過ごす子どももいれば年始の
挨拶に行く子どももいる中で
そのどちらでもなくここで過
ごす子どもも少なくありません☆
そんな子どもたちにとつ
てこの季節が寂しいものとな
らないように祈る他ありません☆
☆お正月にはここで暮らし
た卒園生たちも帰ってきます
☆懐かしい顔ぶれが揃って暖
かい炬燵に大人も子どもも寄
り添う時☆ここに帰ってきて
くれる卒園生たちがお正月の
暖かい雰囲気を作ってくれて
います☆日々模索しながらの
はたらきがこのようなお正月
を浮かび上がらせる☆家族の
色が濃くなる季節に光の子ど
もの家の色もまた濃く表現さ
れます☆その色が更に豊かに
なるよう努めて参ります☆本
年のご理解ご支援のほどよろ
しくお願い申し上げます☆

（洋）